

書 評

増田四郎 講談社現代新書
大学でいかに学ぶか

黄 孝 春*

書評というと、新作を対象にするのが普通だが、ここであえて1966年に出版された『大学でいかに学ぶか』を取り上げる。同書は著者の増田四郎が一橋大学学長在任中（1964-69年）に書かれたもので、私の手元にあるのは1981年5月第38刷で、類書の中で異常と言えるほどのロングセラーであった。日本の高度成長期にあって、しかも中堅大学の文系学生を意識して書かれていたため、その内容がそのまま今の弘大学生の手本になるわけではないが、考えさせられるところがあると思い、大学での学び方に関する同書の考えのいくつかを拾って皆さんに紹介したい。

高校と大学の違い

著者は「大学では、高校までのように、でき上がった知識を身に付ける、あるいは丸暗記するだけでは不十分」と学びの転換を強調している。大学生として勉強する場合、「教科書に書いてあることを正しく理解して、それを覚え込むこと、世の中に出てすぐ役に立つ知識なり技能なりを修得すること、また一部には音楽・美術・文芸、その他いろいろな技能など、世渡りにすぐ役立ちはしないけれども、教養として身に付ける、いわゆるもの知りになること」だけでは、十分ではないし、このような考え方でなされては困ると、著者は明言したうえで、次のような考えを提示している。

「大学で勉強する、学問する究極のねらいは、ひじょうに広い意味で、一貫した立場、ものの考え方によって、あなたの周辺に生起するさまざまなきごとの意味を、統一的にとらえる、そのとらえ方の練習にある」。「それが大学の学問であり、教育だ」。

教養と専門の関係

それでは、大学ではどのように勉強すればよいであろうか。著者は山のように高くなるほど裾野が広がり、また頂上からは遠くを見とることができる、という見地から教養の重要性を説いている。視野が狭いまま、専門的なところへ「追い込まれてしまうと、恐ろしいことに、やがてせまい袋小路に入ってしまう、さて抜け出ようともがいても、なかなかそれができない」というのである。

そして著者は大学に入ったら、あまり最初から専門のことにとらわれなくて、まず、できるだけ語学をやることを勧めている。「それは、あらゆる理屈を抜きにして大事なこと」だという。

「大きな、いい年をしたあなたがたでも、バラは赤いとか、彼女はきれいだとかいうことを、ラテン語やギリシア語でいえたときのうれしさといったら、なにものにもたとえようが」なく、その喜びの純粹さというものは、実になによりも尊いものだと著者はいう。

講義の意味

大学では、講義に触発されて、それぞれに、自分で考える力を養うことが、勉強の主眼になっている

*弘前大学人文学部
Faculty of Humanities, Hirosaki University

から、「学生側として、その講義がはたして一貫した論理をもっているか、あるいは、一貫した立場に立っているか、さらに、はたして自分にも納得できるものかということ、たえず考えながら聞く必要があるわけで」、「自分の心のなかに、なにかあるテーマをつかみ、自分は徹底的にこれを研究してみようという考えをもつ、その機縁をつくるのが、大学の講義のもっともだいじな意味」である。

著者によると、教師側にもほんとうに準備をして、それがうまくしゃべれて、期待していた影響を学生たちに与えることができたと思うような、「池の中へドブんと石を投げてきたような気持ちのいい講義」は一年を通じて3、4回あればまあ成功のほうだという。

ゼミナールの大切さ

学生が自分でつかんだテーマについて研究するための厳しい訓練を受ける場がゼミナールだと著者は考える。したがって就職本位にゼミナールを選ぶのはなんとしても困ることで、「そうではなくて自分がなにをやりたいかによって選ぶのであり、いったん選んだ以上は、最後までその試練に耐えていく根強さがなければならないもの」という。

またゼミナールはひととひととの接触の場でもある。著者は「理想の形はよい師・よい友・よい弟子ということが、互いにいいきれる境地をつくること」。「そう断言できる境地をつくることはいまの社会では、まずもって大学の特権ではないか」と考える。このような境地の中で、なにかの機縁に接触した教師や先輩から、聞いたり感じたりした、ほんのちょっとしたことが一生の支えにもなる。これは読書では得られない貴重なものである。そのためには、「切れば血の出るような生きたゼミナール」でなければならないという。

苦楽一如

著者はさらにいう。勉強というものはまことに無駄の多いもので、能率主義ではなく、むだ骨を折ることが大事なのだ。この考えは無理をするという勉強（中国語）の意味と合致するが、「勉強というのはどれほど苦しい時間でも、それが終わったあとのすがすがしさ、すんだのだ、おれは学んだのだという楽しさはまた、ことばでは表せない、格別なものである」。つまり、自分で苦しんで自分で楽しんでいく、苦楽一如、そういうことの繰り返しであると著者は結んでいる。

以上、大学での学びに関する著者の考えの紹介からわかるように、本書は就職などにとらわれず、あくまでも関心のあるテーマをつかみ、深く勉強する、いわゆる学問本位的思考法に立脚している。これはいうまでもなく入学当初から就職を意識してもらう現在の大学教育方針と大きく異なっている。その是非は皆さんの判断に委ねたいのだが、地域の指導者である「将」の育成が強く求められるいま、著者の考えも傾聴に値する気がする。